

選択による選好の変化は 自己の正当化によって生じているのか

— 関下提示選択パラダイムにおける選択による選好の変化と自尊心の関連 —

○宮城円・宮谷真人・中尾敬
(広島大学大学院教育研究科)

自らの選択によって選んだものの好ましさは変化する。この現象は選択による選好の変化 (choice-induced preference change: CIPC) と呼ばれ、自由選択パラダイム (free-choice paradigm: FCP) で確認されてきた (Brehm, 1956)。従来 CIPC の生起機序は認知的不協和理論 (Festinger, 1957) で説明されてきた。この理論によれば、同程度に好ましいものからより好ましい方を選んだことで生じる不協和を解消するため、自己を正当化する結果 CIPC が生じる。実際、自己の正当化の手段が態度変容しかない自尊心の低い者でのみ CIPC が生じる (Steele et al., 1993)。

だが、近年 FCP の手続きに問題が指摘され (c.f., Chen & Risen, 2010), 適切なパラダイムで CIPC を再検討する必要性が指摘されている (Izuma & Murayama, 2013)。この問題を回避できるものに関下提示選択パラダイム (blind choice paradigm: BCP) がある。このパラダイムでは参加者に刺激を関下提示して選択させ、参加者の好みに基づかない偽の選択結果をフィードバックする。その選択結果を参加者が自分の選択結果であると認識すれば、FCP の場合と同様に CIPC が生じる (e.g., Sharot et al., 2010)。CIPC が自己の正当化によって生じるなら、BCP における CIPC も自尊心と関連すると予測されるが、この点は明らかでない。

本研究は BCP における CIPC と自尊心の関連を検討した。CIPC が自己の正当化によって生じるならば、自尊心と CIPC の生起量に相関があると予測される。

方法

参加者 大学生・大学院生 49 名 (女性 31 名, 年齢範囲 18—26 歳)。

自尊心の測定 ローゼンバーグ自尊感情尺度 (山本他, 1982) を用いた。

手続き 実験は選択前評価、関下提示選択課題、選択後評価から構成した。選択前評価では画像の好ましさを 8 件法 (1: 大嫌い—8: 大好き) で評定させた。関下提示選択課題は目的が潜在的な好

み判断を検討することであると偽り、選択前評価で評定した画像を関下提示し好ましい方を選ばせた。ただし、実際はダミー画像を提示した。選択後に偽の選択結果をフィードバックした。全試行のうち 70% は選択前評価の評定値が同一の画像をペアにし、無作為に決定した画像を参加者が選択したものとしてフィードバックした (高拮抗条件)。30% は選択前評価での評定値が異なる画像をペアとし、評定値が高い画像を参加者が選択したものとしてフィードバックした (低拮抗条件)。選択後評価は選択前評価と同様であった。

結果と考察

関下提示選択課題の偽りの教示を信じていたと回答した 38 名 (女性 24 名) を分析対象とした。CIPC の生起を確認するため、高拮抗条件の選ばれた画像と選ばれなかった画像の選好の変化量について対応のある *t* 検定を行った。その結果、選ばれた画像と選ばれなかった画像の選好の変化量に有意な差があり ($t(37) = 2.12, p = .04$), CIPC の生起が確認された。次に、BCP における CIPC と自尊心の関連を検討するため、選ばれた画像と選ばれなかった画像の選好の変化量と自尊心の相関分析を行ったところ、いずれの選好の変化量との間にも自尊心との相関はなかった。

本研究で BCP における CIPC は、FCP における CIPC とは異なり自尊心の影響を受けないことが明らかになった。この結果から、少なくとも BCP で生起する CIPC、すなわち選んだとフィードバックされたものの好みが増える過程は、自己の正当化に依らない可能性が示唆された。今後は FCP と BCP の違いを考慮した上で、CIPC の生起機序を検討する必要がある。

Table 1

	CIPCの生起量と自尊心の相関係数		
	1	2	3
1. 選択	—	-.51 **	-.17
2. 非選択		—	-.03
3. 自尊心			—

** $p < .01$